

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和6年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第5号（8月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujoshou/index.html>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp



農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理, 安全使用
2. 作物に対する安全 適期, 適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川, 湖沼, 海等への汚染防止)
(養蚕, 養蜂等への危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散(ドリフト)にも注意しましょう

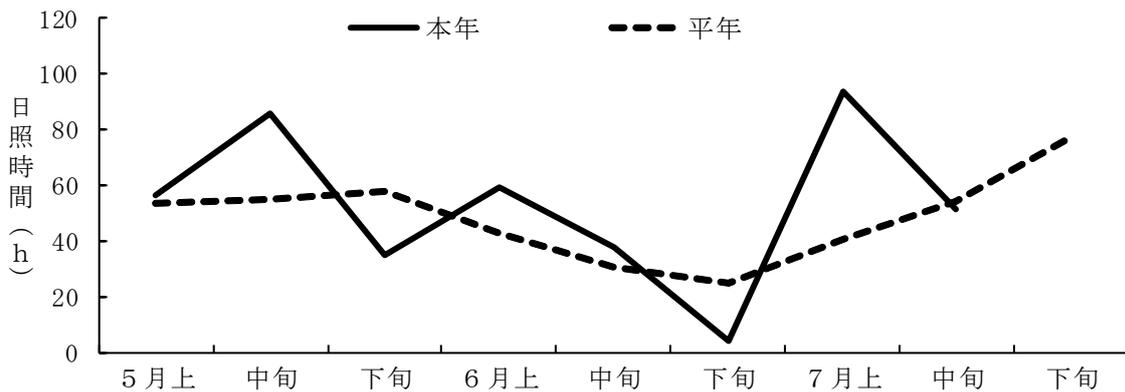
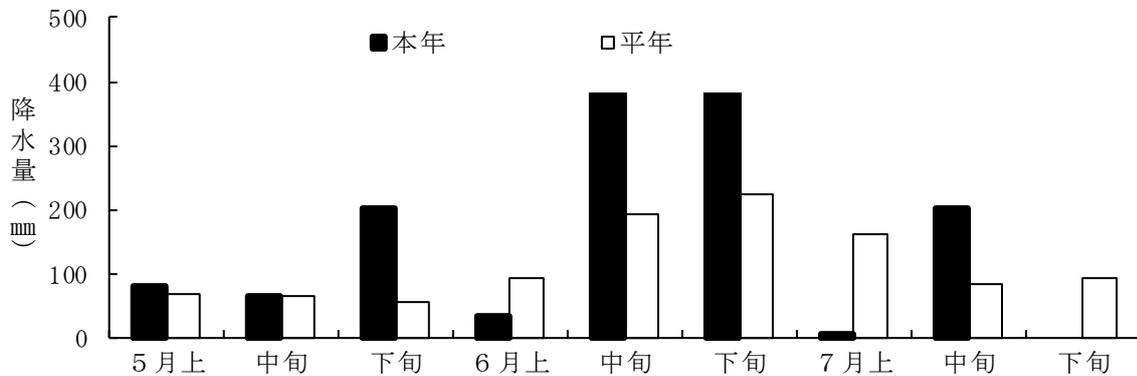
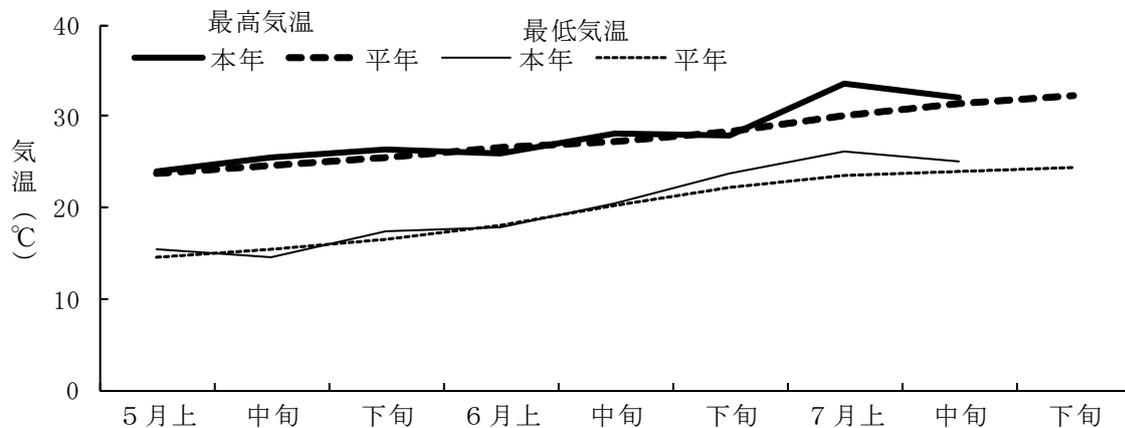
令和6年度 病虫害発生予報 第5号

令和6年7月30日
鹿児島県病虫害防除所

I. 向こう1か月の予報（7月27日から8月26日） 令和6年7月25日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	10	10	80	両地方とも、気温は高く、降水量はほぼ平年並。日照時間は九州南部が平年並みか多く、奄美地方はほぼ平年並。
	奄美地方	10	10	80	
降水量	九州南部	30	40	30	
	奄美地方	30	30	40	
日照時間	九州南部	20	40	40	
	奄美地方	30	30	40	

II. 4～6月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
普通作物	普通期水稲	葉いもち	やや少	やや少
		穂いもち	—	やや少
		紋枯病	並	やや多
		トビイロウンカ	やや少	やや少
		コブノメイガ	やや多	やや多
	サツマイモ	ナカジロシタバ	やや少	やや少
野菜	イチゴ（苗床：子苗）	うどんこ病	やや多	並
		炭疽病	多	多
		ハダニ類	多	多
	サトイモ	疫病	並	やや多
		ハスモンヨトウ	やや多	やや多
花き	キク	ハダニ類（県本土，施設）	並	並
		アザミウマ類（県本土，施設）	やや少	やや少
果樹	カンキツ	かいよう病（果実）（県本土・熊毛地域）	やや少	やや少
		〃（奄美地域）	やや少	並
		黒点病（県本土・熊毛地域）	少	少
		〃（奄美地域）	やや多	やや多
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	やや少	やや少
		〃（奄美地域）	並	並
茶樹	チャ	炭疽病	並	並
		新梢枯死症（輪斑病菌による）	並	並
		網もち病	やや少	やや少
		チャノコカクモンハマキ	並	並
		チャハマキ	やや少	やや少
		チャノホソガ	やや少	並
		チャノミドリヒメヨコバイ	やや少	やや少
		チャノキイロアザミウマ	やや少	やや少
		カンザワハダニ	やや少	やや少

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 普通作物

1. 普通期水稲

(1) いもち病

ア 予報内容

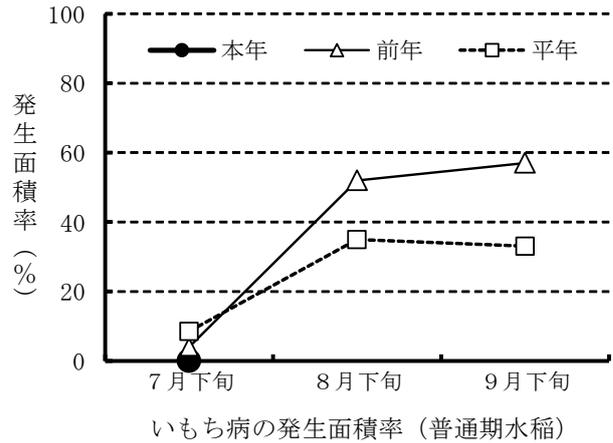
- (ア) 発生地域 県内全域
 (イ) 発生量 葉いもち：やや少
 穂いもち：やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
 発生面積率 0% (平年 9%)：やや低い(-)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 置き苗で葉いもちの発生を認めたほ場があるので置き苗は早めに取り除く。
 (イ) 粉剤または液剤による穂いもち防除は、穂ばらみ期～穂揃期に行う。
 (ウ) 窒素質肥料の多用は発生を助長するので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。常発地や葉色が濃いほ場では、穂肥の施用は控える。



(2) 紋枯病

ア 予報内容

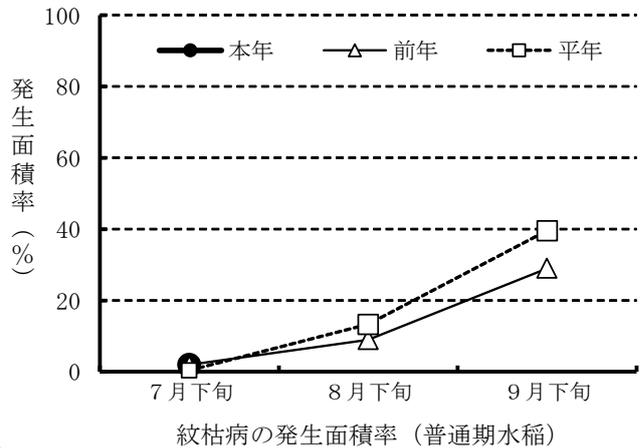
- (ア) 発生地域 県内全域
 (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
 発生面積率 2% (平年 0.4%)：並
 (イ) 気象予報
 気温：高い(+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 今後、気温が高いことが予想されるため、被害が拡大する恐れがある。発生を確認したら、農薬防除を行う。
 (イ) 窒素質肥料の多施用は発生を助長するので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。
 (ウ) 紋枯病が発生している水田では、出穂後も病斑の進展に注意する。



(3) トビイロウンカ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

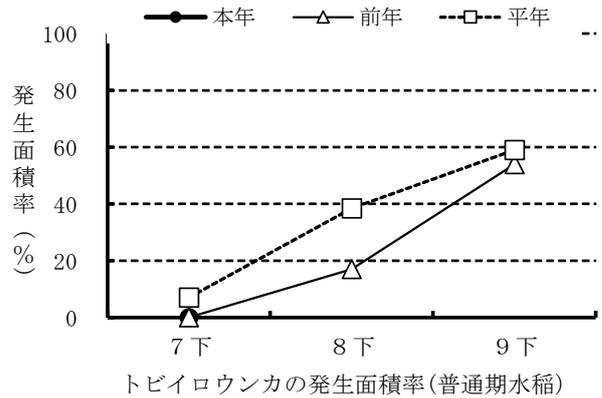
- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生面積率0%（平年7%）

：やや低い（-）

60W水田予察灯での6月1日～7月22日の
誘殺虫数38頭（平年55.5頭）：やや少（-）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 飼料用稲などの育苗箱施用剤を使用していない水田，あるいは，ウンカ類に効果が高いトリフルメゾピリム剤以外の育苗箱施用剤を用いている水田では，本虫の生息密度が上昇する可能性があるため，発生に注意する。
- (イ) 初誘殺日は6月5日（平年6月24日）で，平年より早かった。防除適期は6月15日の飛来に由来する第2世代幼虫が8月3～8月7日，6月21日の飛来に由来する第2世代幼虫が8月8～11日と予想される（表1，図1）。
- (ウ) 本虫は稲の株元に生息するので，粉剤や液剤で防除する場合は，農薬が株元に十分届くように散布する。



(4) コブノメイガ（技術情報第15号，令和6年7月26日）

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生面積率22%（平年17%）：並
発生程度の高いほ場が認められた（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 6月25日の飛来に由来する第1世代成虫の発蛾最盛日は7月27日頃，7月9日の飛来に由来する発蛾最盛日は8月9日頃と予測される（表1，図1）。粒剤による防除は発蛾最盛日，粉剤または液剤による防除は発蛾最盛日の7日後に行う。
- (イ) 止葉を含む上位3葉への被害は収量・品質に影響するので，今後の蛾の発生が多い場合は，第2世代幼虫を対象に防除を行う。
- (ウ) クロラントラニプロールを含む箱粒剤による被害抑制効果の低下した事例が認められている。

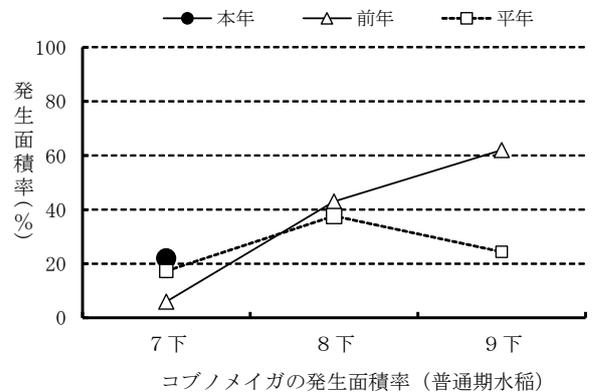
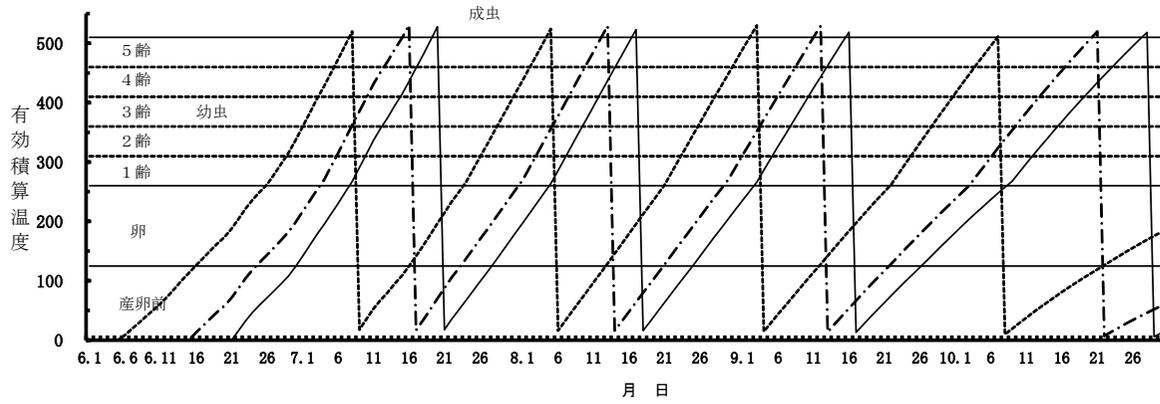


表1 予察灯等におけるウンカ類及びコブノメイガの誘殺状況

日付	60W予察灯（水田）						ジョンソントラップ			フェロモン
	南さつま市			さつま町			南さつま市			
	セジロウンカ	トビイロウンカ	ヒメトビウンカ	セジロウンカ	トビイロウンカ	ヒメトビウンカ	セジロウンカ	トビイロウンカ	ヒメトビウンカ	コブノメイガ
6/1	0	0	0				0	0	0	0
6/2	0	0	0				0	0	0	0
6/3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/4	0	0	0				0	0	0	1
6/5	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0
6/6	0	0	0				0	0	0	0
6/7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/8	0	0	0				0	0	0	0
6/9	69	0	0				26	0	0	0
6/10	7	0	0	1	0	0	0	0	0	0
6/11	1	0	0				0	0	0	0
6/12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/13	0	0	0				0	0	0	0
6/14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/15	3	2	0				0	0	0	0
6/16	11	2	0				6	0	0	0
6/17	2	0	0	0	2	0	5	0	1	0
6/18	2	0	0				0	0	0	0
6/19	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0
6/20	18	0	0				12	0	0	0
6/21	464	5	3	11	6	0	33	2	0	0
6/22	19	0	0				3	1	0	0
6/23	2	0	0				1	2	0	3
6/24	1	0	0	474	16	0	1	0	0	1
6/25	191	7	1				10	0	2	9
6/26	8	0	0	561	4	0	0	0	0	0
6/27	115	0	0				2	0	0	0
6/28	3	0	0	468	0	5	0	0	0	0
6/29	25	0	0				2	0	0	0
6/30	4	0	0				0	0	0	0
6月計	945	17	4	1,518	28	5	103	5	3	14
7/1	3	1	0	385	2	0	0	3	0	0
7/2	0	2	0				0	0	0	0
7/3	0	5	0	184	33	5	0	3	0	0
7/4	1	0	0				1	1	0	0
7/5	0	0	0	21	2	0	0	0	0	0
7/6	1	0	0				0	0	0	0
7/7	0	0	0				3	0	0	0
7/8	0	0	0	276	9	0	0	0	0	0
7/9	0	0	0				0	0	0	1
7/10	0	0	0	4	4	0	0	0	0	0
7/11	0	0	0				3	0	0	0
7/12	0	0	0	1	0	0	3	0	0	1
7/13	2	0	0				0	0	0	0
7/14	2	0	0				0	0	0	0
7/15	5	0	0				0	0	1	2
7/16	5	1	0	277	0	0	1	0	0	0
7/17	0	0	0	7	2	0	0	0	0	1
7/18	0	2	1				0	0	0	1
7/19	0	0	1	7	3	0	1	1	2	2
7/20	3	0	0				0	0	0	0
7/21	3	10	2				0	0	1	11
7/22	0	0	0	6	4	0	0	0	0	4
7/23	0	3	0				0	0	0	19
7/24	0	1	0				0	0	0	9
7/25	0	0	0				0	0	0	5
7/26	1	0	0				0	0	0	0
7/27	0	0	0				0	1	0	0
7/28	0	2	0				0	0	0	2
7/29										
7/30										
7/31										
7月計	26	27	4	1,168	59	5	12	9	4	58
6～7月計	971	44	8	2,686	87	10	115	14	7	72

1. トビイロウンカ



アメダス地点:加世田

2. コブノメイガ

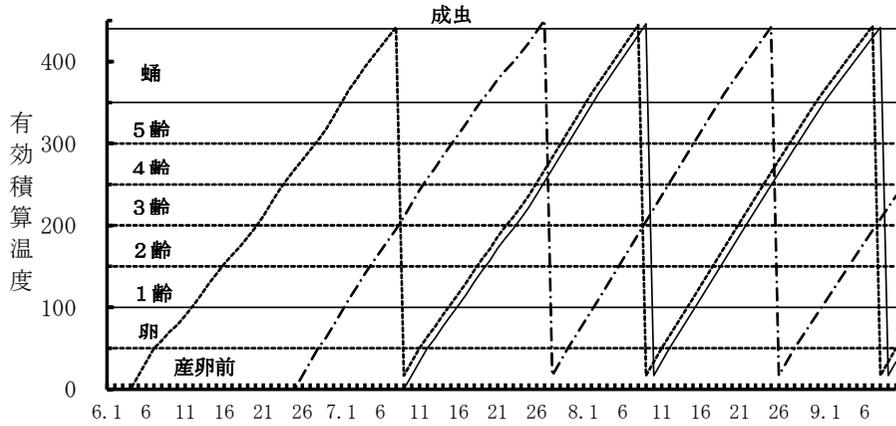


図1 トビイロウンカ, コブノメイガの有効積算温度による発生経過予測図

注) 気温は、加世田のアメダスポイントデータを利用した
 (7/25まで実測値, それ以降は平年値)
 なお、気温の低い地域では予測より2~4日程度遅くなる。

2. サツマイモ

(1) ナカジロシタバ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

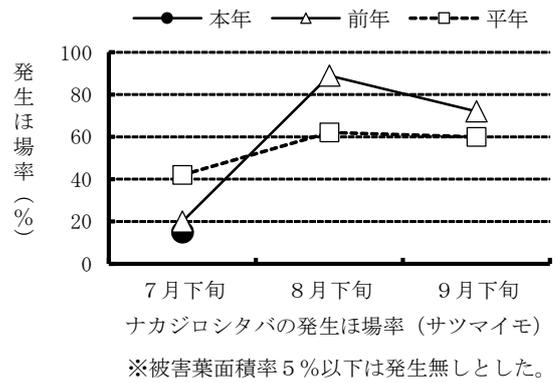
発生ほ場率15%（平年42%）：やや低い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 未展開葉での食害が認められ、若齢幼虫が多
くみられる時期に防除する。

(イ) 農薬散布後も幼虫の発生が多い場合は、2～3週間後に追加防除を行う。

(ウ) 老齢幼虫が多くなると食害の進展が急速に進むので、防除時期を逸しないよう注意する。



Ⅱ. 野 菜

1. イチゴ（苗床：子苗）

(1) うどんこ病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率30%（平年18%）

：やや高い（+）

(イ) 気象予報

気温：高い（-）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 本病が発生しやすい葉裏をよく観察し、早期発見と初期防除に努める。

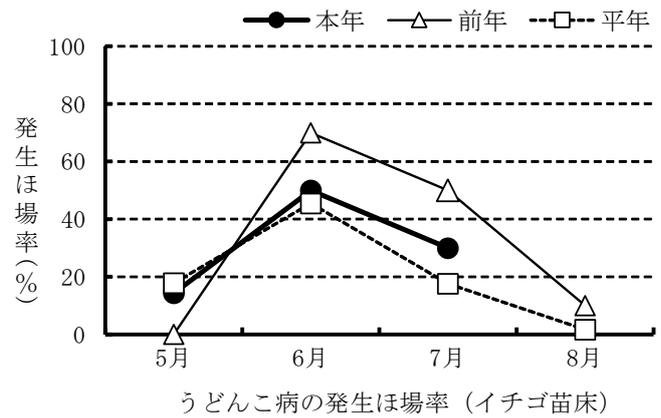
(イ) 雨よけ育苗施設では発生が多くなる傾向にある。

(ウ) 発病葉や古葉は除去し、ほ場外へ持ち出して処分する。

(エ) ランナー切り離し前までの防除を徹底し、葉裏や下位葉に農薬が十分かかるよう散布する。

(オ) 農薬によっては耐性菌の発生が懸念されているので、散布後は防除効果を確認する。

(カ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



(2) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率30%（平年9%）

：高い（+）

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 雨よけ、排水対策及び防風対策を徹底する。

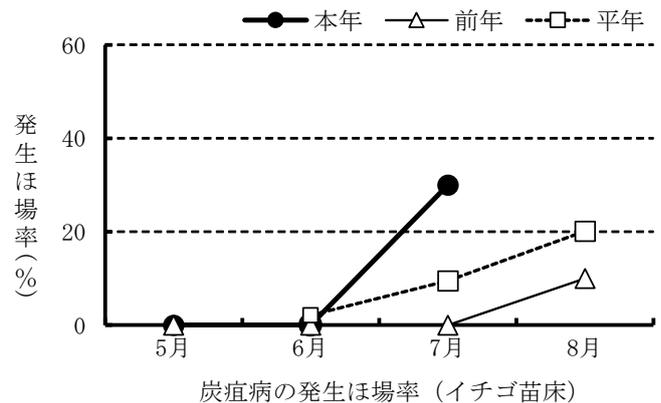
(イ) 灌水はできるだけ水滴が小さくなる灌水チューブ等を用い、土壌の下葉へのはね返りを防ぐ。

(ウ) 子苗は十分な間隔を置いて並べ通風を図り、過湿とならないように注意する。

(エ) 生育不良の親株や萎凋した子苗は発病している可能性があるため、早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。

(オ) 農薬による予防散布は新葉の展開に合わせて行い、株元、ランナー、葉裏などに十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。

(カ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



(3) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率60% (平年25%)

: 高い (+)

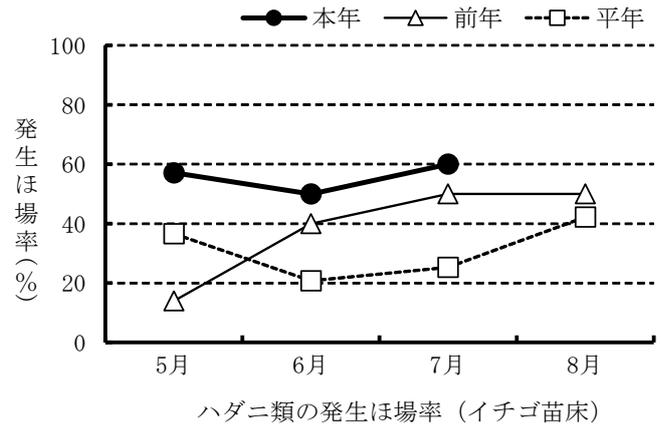
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 下葉や寄生葉は摘葉し、ほ場外に持ち出し処分する。

(イ) 農薬の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。

(ウ) 農薬によっては感受性が低下しているため、散布後は防除効果を確認する（令和4年度技術情報第9号（11月29日付け）参照）。

(エ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



2. サトイモ

(1) 疫病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

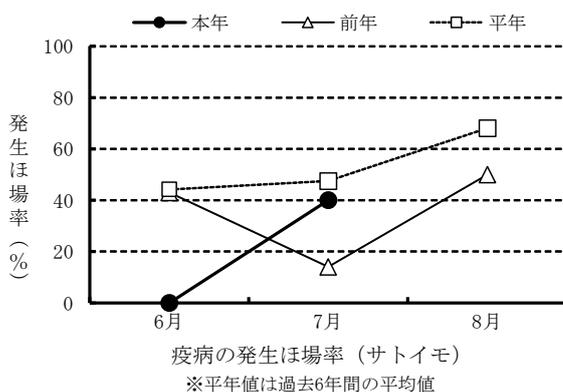
- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率 40%（平年47%）：並

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ほ場の額縁部分で発生しやすいため、ほ場周辺をよく見回り、早期発見に努める。
- (イ) 台風等で降雨が続くと急激に発生が拡大するので、発生を確認したら直ちに治療効果のある農薬を7日間隔で複数回散布し、防除を徹底する。
- (ウ) 発病茎葉は発生源になるので、早めに摘み取ってほ場外へ持ち出し、適正に処分する。



(2) ハスモンヨトウ

ア 予報内容

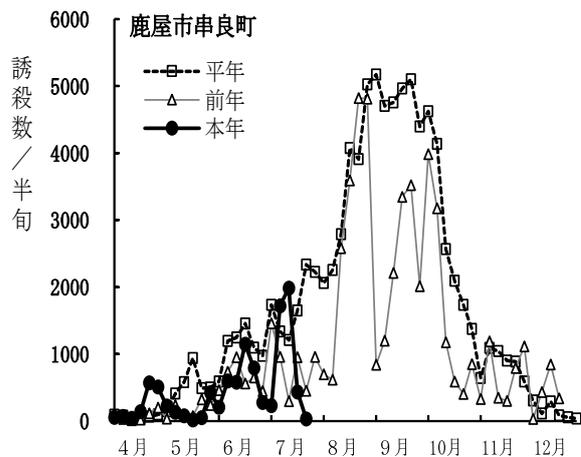
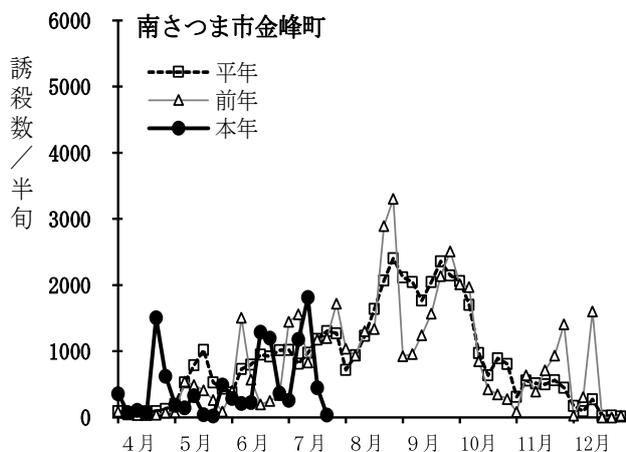
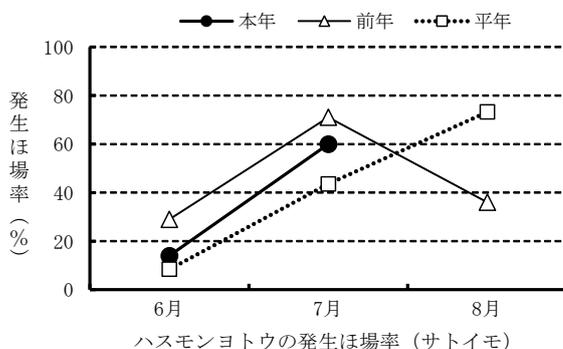
- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 やや多
発生ほ場率60%（平年47%）：やや高い

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生状況は各地域で異なるため、ほ場を見回り、幼虫の発生状況を確認する。
- (イ) 若齢幼虫は集団で表皮だけを残して食害するので、発生を目安にする。
- (ウ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
- (エ) 中・老齢幼虫になると農薬が効きにくいので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。



Ⅲ. 花き

1. キク

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率40%（平年44%）：並

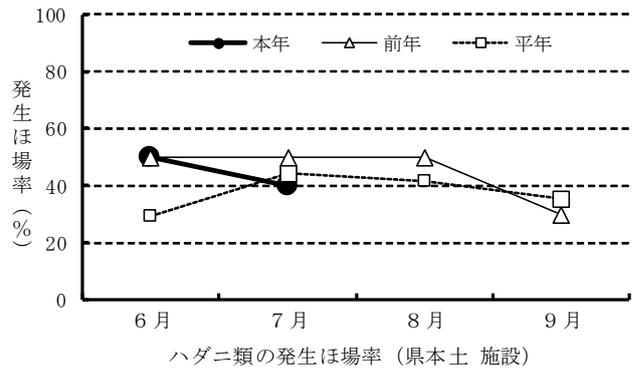
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生する機会が多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

(イ) 薬液は葉裏までよくかかるように散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率30%（平年38%）

：やや低い（－）

ウ 防除上注意すべき事項

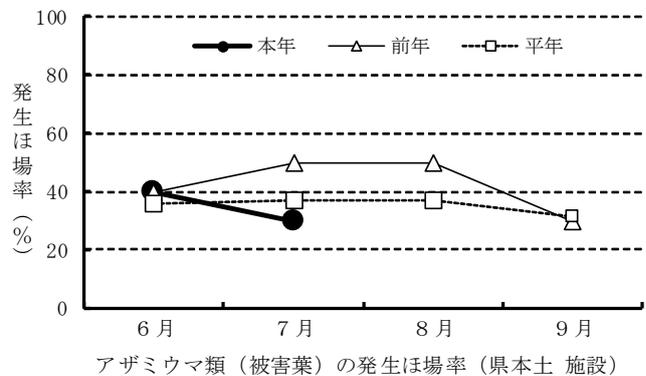
(ア) 7月中下旬の調査では主要種はミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマであった。発生のもりタニングには、出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。なお、クロゲハナアザミウマの誘引効率はやや低いと思われる。

(イ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(ウ) アザミウマ類はキクえそ病（TSWV）、キク茎えそ病（CSNV）を媒介するので、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。

(エ) クロゲハナアザミウマは主に中下位葉に寄生しているため、薬液は下葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(オ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。



IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域(果実) やや少

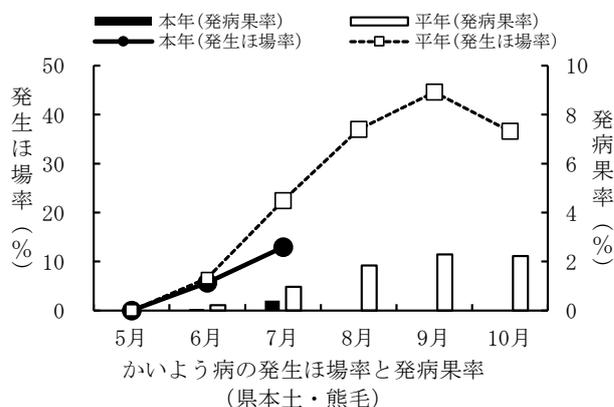
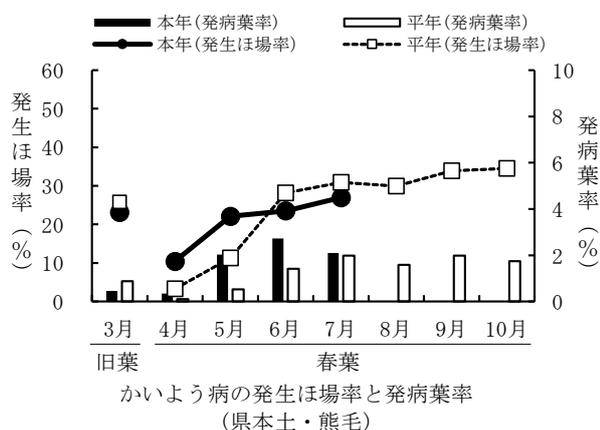
奄美地域(果実) 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	やや少
発生ほ場率	27% (平年 31%) : 並	13% (平年 22%) : やや低い (-)
発病率	2.1% (平年2.0%) : 並	0.4% (平年1.0%) : やや低い (-)



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	やや少
発生ほ場率	0% (平年 6%) : 並	0% (平年 7%) : 並
発病率	0% (平年0.1%) : 並	0% (平年0.1%) : やや低い (-)

ミカンハモグリガの発生ほ場率57% (平年24%) : やや高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、ミカンハモグリガの防除を徹底する。

(イ) 台風の風傷害により発生が多くなることが予想されるので、台風前の防除を徹底する。

(2) 黒点病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 少

奄美地域 やや多

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：少

発生ほ場率 3% (平年 24%)

: 低い (-)

発病果率 0.1% (平年 2.8%)

: やや低い (-)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 14% (平年 0%) : 高い (+)

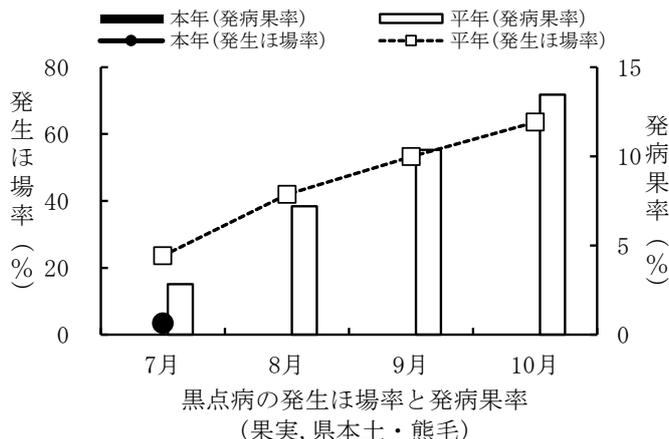
発病果率 0.1% (平年 0%) : 高い (+)

発生ほ場の発生程度は低い (7ほ場調査で1ほ場確認) (-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 農薬の残効は降水量と散布後日数の影響を受ける。発生が認められたほ場では、落花期以降の4月中旬、5月下旬及び6月中旬の降水量が多く、農薬散布が遅れたためと推察される。散布の目安は累積降水量250~300mmとし、累積降水量がこれより少なくても1か月程度経過したら次の散布を行う。

(イ) 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。



(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや少

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 14% (平年 23%) :

やや低い (-)

寄生葉率 1.5% (平年 4.9%) :

やや低い (-)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

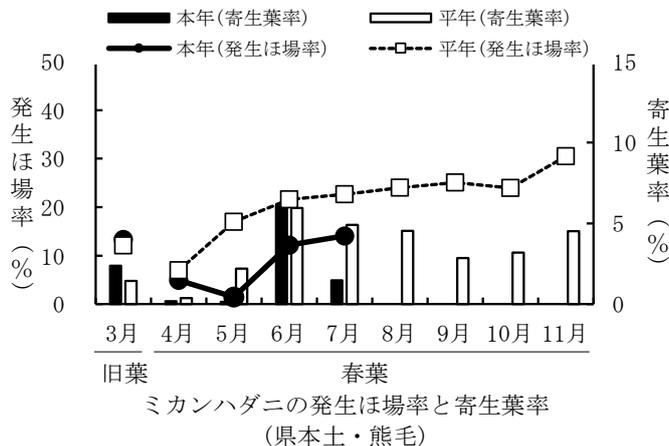
発生ほ場率 0% (平年 3%) : 並

寄生葉率 0% (平年 0.02%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数0.5~1.0頭 (寄生葉率で30~40%) を目安に防除する。

(イ) 作用性の異なる農薬 (RACコード参照) のローテーション散布を行う。



防除に関する今月の留意事項

1. 果樹共通

(1) 果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ, ツヤアオカメムシ)

ア 予察灯での誘殺虫数は, チャバネアオカメムシについては平年に比べてやや少~並, ツヤアオカメムシについては並~多であった (表1, 図1)。各予察灯での最新の誘殺虫数は, 鹿児島県病害虫防除所ホームページを参照。

イ ヒノキ球果の口針鞘数 (吸汁痕数) は, 7月前期では1.0本/果 (平年0.4本/果), 後期では4.0本/果 (平年2.5本/果) と平年に比べて多かった (表2)。ヒノキ球果 (餌植物) からの離脱の目安は25本/果で, それ以降は果樹園等へ飛来する危険性が高まる。

ウ 果実が吸汁被害を受けると, カンキツでは果汁が抜けてスポンジ状となったり, 落果するため飛来を認めたら直ちに防除を行う。

エ 作用性の異なる農薬 (RACコード参照) のローテーション散布を行う。

表1 予察灯の誘殺状況 (7月第1~4半旬の総誘殺虫数) (単位: 頭)

調査地点	チャバネアオカメムシ		ツヤアオカメムシ	
	本年	平年	本年	平年
南さつま市金峰町	89	497	255	234
いちき串木野市湊町	—	94	—	52
出水市美原町	520	1,875	4,564	720
鹿屋市串良町	15	20	79	47
誘殺虫数	やや少~並		並~多	

注1) 平年は2014年~2023年の10年間の平均値, いちき串木野市湊町は欠損

注2) 予察灯の光源は, 南さつま市金峰町は水銀灯100W, 鹿屋市串良町は捕虫灯20W, 他は捕虫灯40W

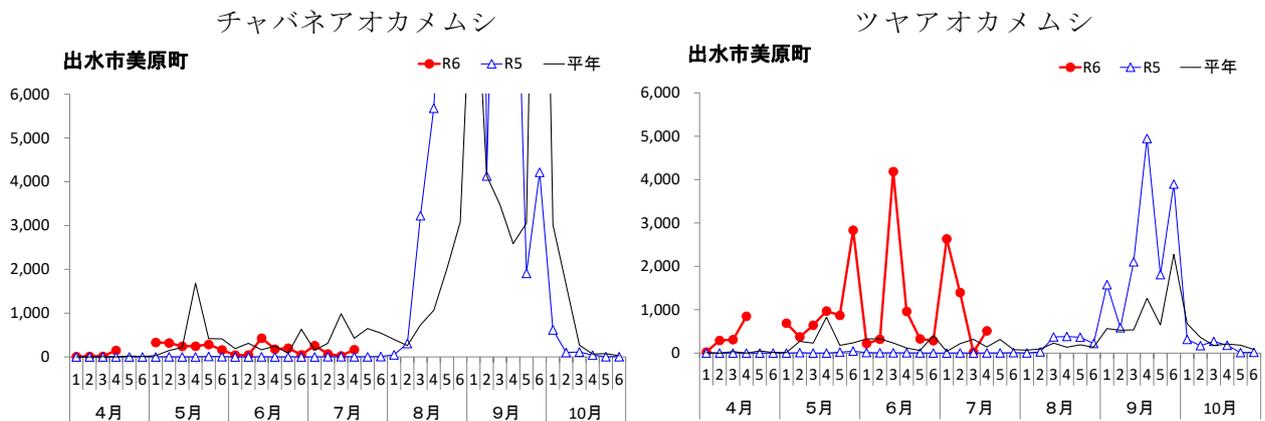


図1 出水市美原町の予察灯での果樹カメムシ類の誘殺虫数の推移

表2 ヒノキ球果の口針鞘数 (吸汁痕数) の推移 (単位: 本/果)

	7月		8月		9月	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期
本年	1.0	4.0				
平年	0.4	2.5	6.3	10.0	15.3	19.7

注1) ヒノキ球果の採取は県内8地点において, 7月前期は7/1~4, 7月後期は7/19に実施

注2) 7月後期の各地点の口針鞘数 (本/果) は, 南さつま市: 1.7, いちき串木野市: 4.7, 阿久根市: 2.8, 出水市①: 5.5, 出水市②: 7.4, さつま町: 3.3, 霧島市: 6.1, 曾於市: 0.3

注3) 平年は, 2014年~2023年の10年間の平均値

V. 茶 樹

1. チャ

(1) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率58% (平年52%)

: やや高い (+)

1 m²当り病葉数3.8枚 (平年6.2枚)

: やや少 (-)

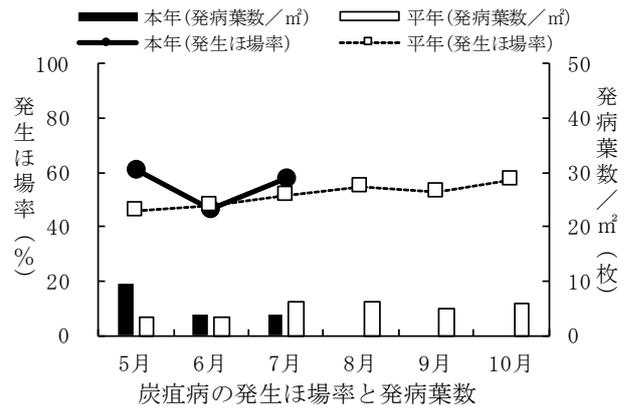
発生程度は低い (-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発生源となる病葉が少なくても、秋芽生育期に降雨が続くと発生しやすい。

(イ) 秋芽萌芽期～1葉期に予防剤で、3～4葉期に治療効果の高い農薬で防除する。

(ウ) 降雨が続き、防除時期が遅れた場合は3～4葉期に予防剤と治療剤を混用して防除する。



(2) 新梢枯死症 (輪斑病菌による)

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

(ウ) 感染時期 秋芽生育前期

(エ) 発生時期 秋芽生育後期

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量(輪斑病)：並

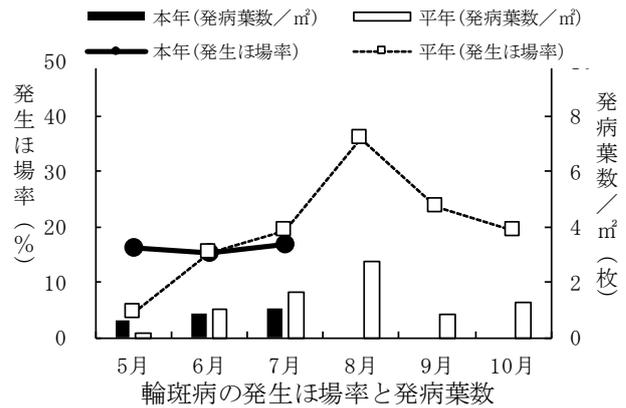
発生ほ場率(輪斑病)17% (平年19%)：並

1 m²当たりの病葉数(輪斑病)1.0枚 (平年1.7枚)：やや少 (-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 二・三番茶摘採残葉に輪斑病の発生が多く、秋芽萌芽期～3葉期に降雨が多いと多発する。

(イ) 炭疽病との同時防除を考慮する。



(3) 網もち病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや少

(ウ) 感染時期 秋芽生育期

(エ) 発生時期 10月

イ 予報の根拠

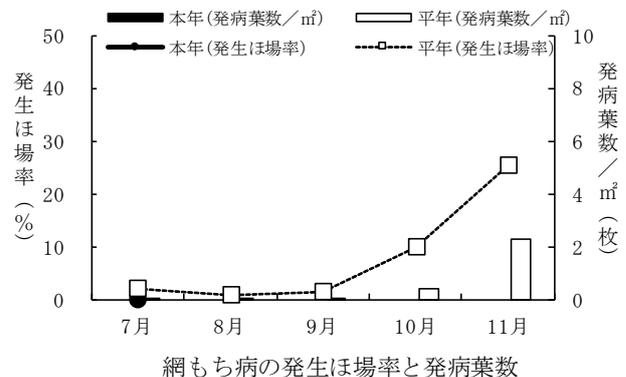
(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率0% (平年2%)

: やや低い (-)

1 m²当たりの病葉数0枚 (平年0.04枚)

: やや少 (-)



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 本病の感染は新葉に限られ、秋芽生育期に多湿条件が続くと多発する。
- (イ) 炭疽病には強いが網もち病には弱い「あさのか」等の品種には注意する。
- (ウ) 更新園であっても周辺に発生源があると多発するおそれがあるので防除を行う。
- (エ) 常発園では、3～4葉期の防除に加えて、9月上旬にも銅剤等で防除する。

(4) チャノコカクモンハマキ, チャハマキ

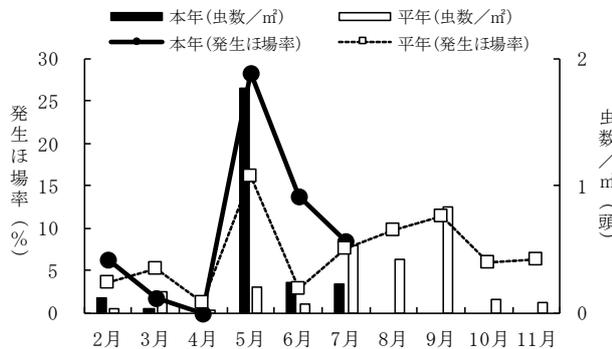
ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 チャノコカクモンハマキ 並
チャハマキ やや少
- (ウ) 発生時期 チャノコカクモンハマキ 早い
チャハマキ ー

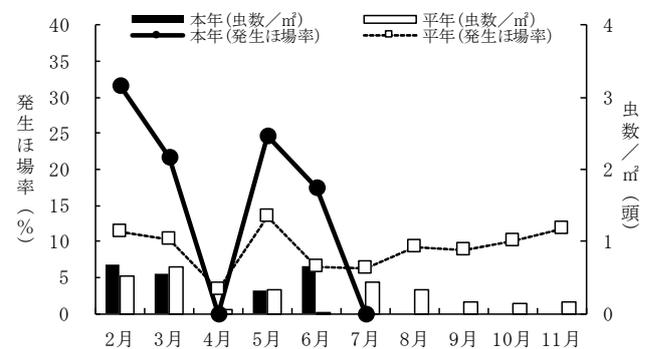
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

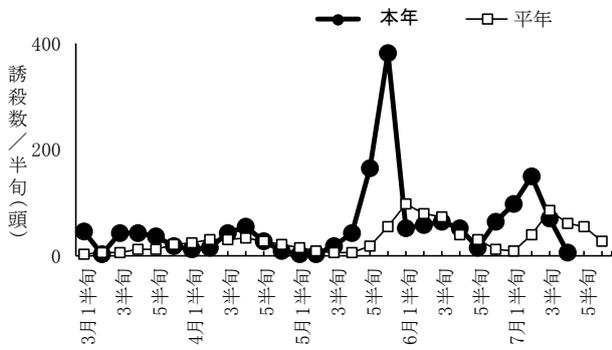
	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
発生量	並	やや少
発生ほ場率	9%(平成8%) : 並	0%(平成6%) : やや低い(ー)
虫数(1㎡当たり)	0.2頭(平成0.5頭) : 並	0.0頭(平成0.4頭) : やや少(ー)
＜南九州市知覧町フェロモントラップ＞		
誘殺数(6月第1半旬～7月第4半旬)	404頭(平成240頭) : やや多(+)	68頭(平成81頭) : 並
第二世代の発蛾ピーク	早い	ー



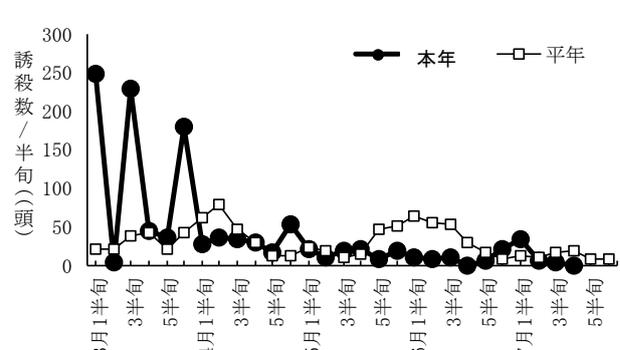
チャノコカクモンハマキの発生ほ場率と㎡当たり虫数



チャハマキの発生ほ場率と㎡当たり虫数



チャノコカクモンハマキのフェロモントラップ誘殺数
(南九州市知覧町)



チャハマキのフェロモントラップ誘殺数
(南九州市知覧町)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 農薬で防除を行う場合、防除適期はふ化～2齢期(発蛾最盛日の10～15日後)である。

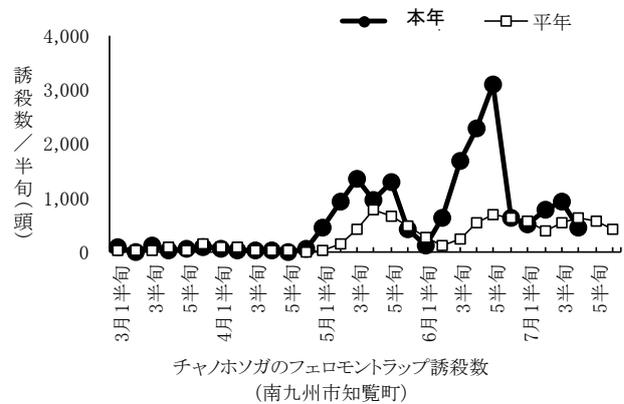
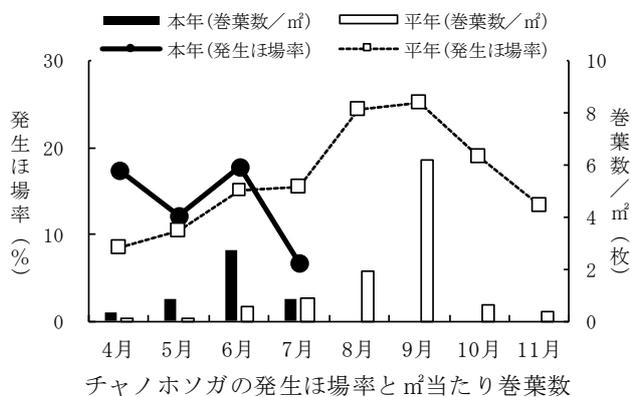
(5) チャノホソガ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 並
- (ウ) 発生時期 早い

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
 発生ほ場率 7% (平年15%)：やや低い (-)
 m²当たり巻葉数 0.9枚 (平年0.9枚)：並
 <南九州市知覧町フェロモントラップ>
 誘殺数 (6月第1半旬~7月第4半旬)
 6,324頭 (平年3,401頭)：多 (+)
 第三世代の発蛾ピーク：早い



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 巻葉してからの防除は効果が劣るので、適期防除に努める。
- (イ) IGR剤及びジアミド系薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。

(6) チャノミドリヒメヨコバイ, チャノキイロアザミウマ

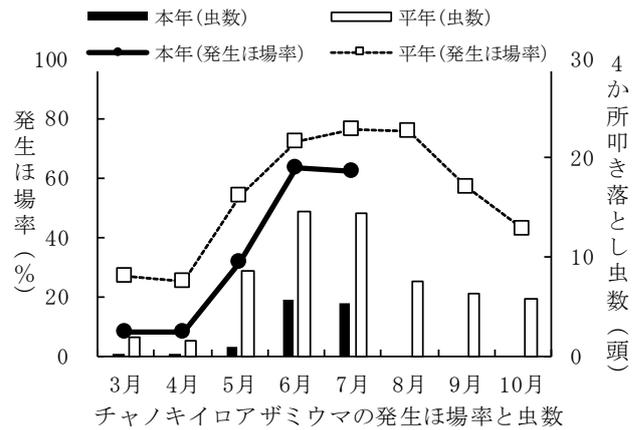
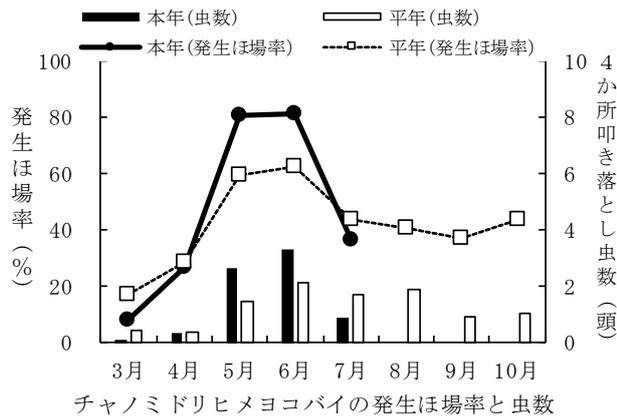
ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ やや少
 チャノキイロアザミウマ やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
発生量	やや少	やや少
発生ほ場率	36% (平年 44%)：やや低い (-)	62% (平年 76%)：やや低い (-)
虫数(4か所叩き落とし)	0.9頭(平年1.7頭)：やや少 (-)	5.2頭(平年14.5頭)：少 (-)



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 秋芽での被害は翌年の一番茶への影響が大きいため秋芽の防除を徹底する。

(イ) 晴天が続くと多発する場合がありますので注意する。特に更新園や幼木園では、新芽の伸長期間が長いので被害が継続し樹体への影響が大きい。

(7) カンザワハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

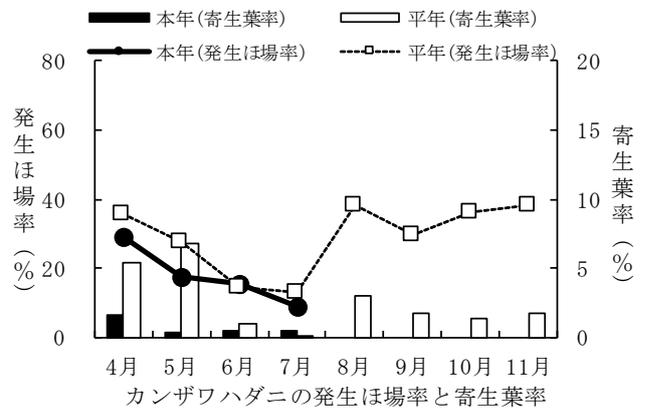
(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 9% (平年 13%)

：やや低い (-)

寄生葉率 0.5% (平年 0.1%)

：やや高い (+)



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 今後、天敵の活動が活発になる時期なので、防除する場合は天敵に影響の少ない農薬を使用する。

(イ) 更新園では秋芽生育期に多発することがある。

防除に関する今月の留意事項

1. 農薬の使用について

近年、てん茶、有機茶、輸出茶等栽培が多様化している。また、近年更新園が多く、更新の時期や程度により防除時期が園地により異なる。このため、農薬を散布する際は、隣接茶園等へのドリフトがないように十分注意するとともに、摘採前日数を遵守する。また、摘採前であることを知らせる「旗」の設置等により周辺の生産者に知らせる等、ドリフトによる事故が起こらないよう十分に注意喚起を行う。

2. 更新園について

更新園は、芽の再生が園によって異なり生育期間が長く、萌芽～生育初期に病虫害の集中加害を受けやすい。更新後の生育を順調に進めるため、病虫害対策（チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、チャノホソガ、カンザワハダニ、炭疽病、輪斑病、新梢枯死症等）は適切に行う。

3. クワシロカイガラムシ

本年6月の発生は場率は、本年13%（平年23%）でやや低かった。また、第二世代ふ化最盛期（有効積算温度による推定）は平年と比べ6～9日早かった。

今後の防除適期である第三世代ふ化最盛期も、平年より早まることが予想されるため注意する（表）。ただし、夏場に高温日（最高気温が32℃を超える日）が多い場合は発育が抑制されるため、予測日よりふ化最盛期が遅延する可能性がある。このため、ふ化状況を調査し、ふ化最盛日を把握する。

なお、農薬で防除する場合は、ふ化最盛日から5日以内に枝や幹に十分かかるように散布する。

表 有効積算温度による防除適期（第三世代ふ化最盛期）予測

地 点	ふ化最盛期		
	本年（平年差）	前年	平年
枕 崎	8月19日（-7）	8月20日	8月26日
加 世 田	8月23日（-7）	8月25日	8月30日
さつま柏原	9月7日（-9）	9月9日	9月16日
溝 辺	9月8日（-10）	9月12日	9月18日
鹿 屋	8月26日（-9）	8月29日	9月4日
志 布 志	9月1日（-6）	9月1日	9月7日

注1) 予測は、アメダスの日平均気温・日最高気温（7月27日までは本年観測値、7月28日以降は過去10年間の平均値）を用いた。

2) 有効積算温度は、第一世代が発育零点10.5℃、1月1日を起算日として積算（日平均気温：322日度）した。第二・三世代は発育零点7.1℃、前世代の防除適期の翌日を起算日として積算（日平均気温：1000日度）した。

3) 高温による発育遅延がみられることから、日最高気温31.5℃以上の日における有効積算温度は日平均気温に0.85を乗じた値を用いた。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋等）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. 散布時には農薬がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。
6. クロルピクリン剤は、住宅地及び畜舎に隣接するほ場や、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。
7. 毒性が強い農薬は、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬及び使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等に基づいた総合評価。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（+）、（-）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平均値を用いている。